

ループが作られて、解散、あとは郷里への旅となりました。終戦の詔勅を聞いてまもない引揚げ者第一号だったのです。

山陽本線に乗りました。東窓は遮蔽されて外は見えませんでした。北陸線に乗り換えるために米原におりました。そのとき同じホームに数人のよごれた服を着た軍属がいるのです。近づいてみたら知っている顔、しかもその中に主人もおったのです。本当に偶然でした。互いに目と目をあわせ、無事を確かめました。こうして、私達は九月上旬に、主人と一緒に家に行くことが出来たのです。

思えば、十月に結婚、翌年四月に渡満、九月には引揚げという慌ただしい日月。苦労のために海を渡り、全財産を失い、ゼロからの再出発となりましたが、私達には、健康と若さがありました。無蓋車に乗せられた家族の中には、暑さと疲労で、うずくまっていたお年寄りもいました。お産して平時なら産じょくにいる体なのに、むくんだ顔で赤ちゃんをだいて、ほんやりと立っている若い婦人もいましたし、途中生命を亡くし、水葬をした方々

もおりました。そして男児三十四人、女児二十五人の私の教え子も無事に両親の故郷に辿りつき、強く生きぬいてくれることを祈りました。

戦争は、この世の地獄です。しかも一番苦しむのは、何も知らない一般庶民なのです。二度とこんな戦は起こらないよう願います。

分村開拓団の崩壊

山形県 飯野 清平

満州事変・支那事変の進行により、国策として満州開拓が推進され、多くの日本人が満州大陸へ渡った。

私達の柏倉門伝村でも分村開拓団が計画され、昭和十五年四月先遣隊の一行、二十八人が故国に別れを告げ渡満した。分村は吉林省盤石県板橙河に作られ、入植戸数六十八戸、入植者は二百九十人にのぼった。だが開拓の夢は敗戦の中で完全に打ち砕かれ、私達は着の身着のまま引き揚げなければならなかった。

昭和二十年八月十五日、太平洋戦争は日本の敗戦により終結した。

この日、磐石県公署の副県長より、「終戦により、各開拓団は、身廻り品のみ持参し、速やかに現地より引き揚げよ。」との至急電報がはいった。私達は団員総会を開き団の進退について協議を重ねたが結論は難しかった。十八日頃になると、各部落共に、見慣れぬ満人や鮮人達の往来が激しくなり、不安がつるばかりだった。今は一刻の猶予も許されない状態になったので、本部から、午前十時に次のような指令が発せられた。「本日、午後三時、身廻り品のみ持って本部前に集合。すぐ現地に引き揚げる。」もう各部落ではあたかもお祭りのように原住民達による家財等の物色がはじまっていた。

本部では大旺村公所に対し、三十八台の馬車と自警隊の護衛輸送を懇請し快諾を得た。

午後八時、三十八台の馬車と自警隊の護衛のもとに二十四キロの夜道を急いだ。途中何事もなく無事通過した。

入植以来五か年余、丹精こめて作った田圃には、もう

稲の穂が出始めていた。畑には高粱や、とうもろこし等もよく伸び、飼い馴らした牛馬、豚、鶏などはみんな現住民地に持っていかれてしまった。

一晩中馬車に揺られ、明城に付いたのは午前六時頃だった。しかし、ときすでに治安が乱れ不穏な空気がただよっていた。

ここからすぐ列車にて南下し奉天へ行くつもりだったが、もう列車の動きは完全に止まってしまっていた。止むなく二キロばかり離れている隼人開拓団へ向った。もう、既に近くの開拓団も集まっていた。暫くはここで暮らすことになる。

治安の悪化に対処し、銃と手榴弾を手に、東西南北の各門に交替で歩哨に立つことにした。

一、三日して明城自警隊が暴民の襲撃を受け隣にある電化工業所に逃れたと報告がはいった。翌日は私達の隼人開拓団にも数人の匪賊が来襲してきた。幸い歩哨の交代時だったので、すぐ応戦し、敵二人を射殺した。

満軍より、若い女性を強要され、それを拒否したため、団員一人が射殺された。また軍隊から帰って来た者と保

安隊員とのトラブルからまたしても一人が射殺されてしまった。

疎開して約一か月ばかりたった頃、そろそろ他の開拓団も撫順に向かつて出発した。私達も撫順へ疎開出来るように、保安隊と明城駅長に交渉した結果、九月二十一日撫順へ出発させてもらう約束をとりつけた。

その日の朝、全員が部落の広場に集合し保安隊の身体検査や持ち物の検閲を受け、縫い針、鋏、眼鏡、時計等没収されてしまった。終わって二キロの道程を明城駅へ急ぎ午前十一時の列車に乗車し翌日撫順へ到着した。途中で列車が停車するとすぐ現住民たちが汽車の入口や窓から侵入し、金目のある時計や万年筆など没収され、ひどいことに子供のおむつまでも取り上げる始末だった。

撫順へ着いて、永安台工業学校収容所へ入所し集団生活をする事になった。まちにはソ連の兵士達がうろろしていた。

男の人達は、撫順炭鉱大山採炭所に就職し、工作関係の仕事についた。女の人は髪を切り、丸坊主になり男装をして、饅頭などを売り歩き生活費の足しにした。

やがて秋も深まり寒さがきびしくなる頃、運よく、大山採炭所の工人宿舎が空いたので早速ここに移転した。炭鉱のすぐそばでスチームが入り、とても暖かかった。

しかし体力の弱い老人や子供達は、不規則な生活や慣れない食事などのせいもあり、下痢や発疹チフスなどの疫病が流行し、毎日のように死亡者が続出した。みんなの賃金でみんなの共同生活をして暮らしていたが、婦人や子供達は、石炭などを拾って袋に詰め町へ売りに行き、豆腐屋や饅頭屋等で買ってもらい生活のたしにしていた。時々ソ連軍の歩哨に見つかり自動小銃でおどかされたりしたこともあった。

やがて春が訪れ、五月になり、待ちに待った引き揚げの話が聞かれるようになった。私達にも五月六日撫順市日僑俘管理所より、六月三日帰国との正式の引揚げ命令が通達された。炭鉱での生活や苦勞も忘れて、内地へ帰れるという喜びでいっぱいだった。

六月二日、荷物の検査、引揚げ事務一切を完了、愈々六月三日午後六時撫順を後に引き揚げる事になった。終戦後十か月間の苦難と多くの犠牲者を出しながらの辛

い収容生活も終わりとなった。無蓋貨車の引揚げ列車に乗り撫順駅を出発、奉天、錦州を通りコロ島に到着、ここから乗船となるので、荷物の検査、予防注射を受ける。六月十一日午前十一時引揚げ輸送船にて出帆。黄海を渡り、丸々三日間船に揺られ六月十四日佐世保へ入港した。しかし、船内に赤痢患者が出たため、上陸できず十三日間船内での生活が始まった。ここで疲労をいやし、検疫、予防注射を受け久しぶりに米のご飯と祝い酒を戴いたとき、ようやくみんなの顔も明るく生き生きとして来た。

六月三十日、佐世保駅より引揚げ列車に乗る。援護局の人々や町の人達の見送りを受け、一路故郷へ。七月三日午前七時三十分、懐かしの山形へ到着。母村の人々の出迎えの車に乗り、故郷入りをする。未帰還者二人、死亡者七十三人、引揚げ者百六十八人、それぞれ親戚の人達に引き取られ家路に着いた。

惨たる逃避行ひと月間

東京都 鈴木正一

熱河省の青龍県から、八月十九日昼、私ら四家族十三人は、子どもと荷を少し馬車に乗せ、平泉を目ざして急ぐ。数日來の雨で道は寸断されて遅々。部落に泊る。

翌朝、小雨の中を出発。濁流を渡るのだ。振り落とされまいと家族らは子どもをかばい、ゆるる馬車に必死でしがみつく。

びしょ濡れになって夜、大地警察署前に着いた。が、入れない。先発の婦女子一団が雨で足止めになって署に居るほか、日本軍の分遣隊も駐留しているので満員。李署長の指示で隣りの村公署建物に泊る。

ところが、翌朝八時ごろ突然けたたましく警察署のほうで銃声があった。私らにつき添ってきている協和会の使用人の邵連祥が「日本軍と警察隊が撃ちあいになった」と駆けこんできた。